

### 共に生き、支え合う社会づくりを目指して 第61回県社会福祉大会開催報告

去る10月18日、永年にわたり本県の福祉の推進に貢献された方々の功績をたたえる、第61回県社会福祉大会を県立音楽堂(横浜市西区)において開催しました。

第1部の記念講演では落語家の林家源平さんを招き、「落語家のヘルパー修行日記 介護は十人十色」と題し、自らホームヘルパー2級資格を取りデイサービスセンターで働かれた経験から感じたことを、笑いを交えながらご講演いただきました。

第2部の式典では、県知事表彰、県社協会長表彰及び感謝、県共同募金会会長感謝の授与、そして第20回介護賞と、未来の福祉の担い手となる若い社会福祉施設従事者を表彰するため本年度から設けられた、かながわ福祉みらい賞の贈呈式が行われ



落語家の  
林家源平さん

ました。

本年度の内訳は、県介護賞(6人)、かながわ福祉みらい賞(1人)、社会福祉関係者表彰(67人、5団体)、民生委員・児童委員永年勤続表彰(31人)、共同募金運動功労者表彰(28人、14団体)、県社協会長表彰(1385人、92団体)、県社協会長感謝(153人、12団体)、県共同募金会会長感謝(144人、44団体)でした。

受賞者を代表して、保護司の河西英彦さん(横浜市鶴見区)から「支え合いと助け合いの、安全で安心の街づくり」に尽力していくことを誓い、「す」とご挨拶をいただき大会を終りました。

今回受賞されました1815人、167団体の皆さま、おめでとございます。今後のさらなるご活躍をお祈り申し上げます。

(総務担当)



受賞者代表の  
河西英彦さん

### 社会的養護の理念と現場の架け橋を探る 第27回関東ブロック児童養護施設職員研修会開催報告

10月23日からの2日間、本県において、第27回関東ブロック児童養護施設職員研修会を開催しました。

児童福祉法施行以来、初めてとなる職員配置等の最低基準の引き上げや、厚労省の「社会的養護の課題と将来像」において施設の小規模化・里親推進の方針が示されるなど、児童福祉を取り巻く環境は大きく変化しています。また、虐待体験のある児童や発達障害のある児童の増加など、入所児童やその家族に必要な関わり方も変化してきています。

そこで今回は田崎吾郎さん(箱根恵明学園施設長)を長とする実行委員会を児童福祉施設協議会内に立ち上げ、「社会的養護の理念と現場のギャップ」に着目し、崇高な理念だけでは解決できない、日々子どもたちと向き合う職員だからこそ抱える悩みを共有し、「社会的養護の理念と現場の課題をどうつなげるか」を考

える機会を目指しました。

1日目は、全国児童養護施設協議会会長の加賀美尤祥さんの基調講演「児童福祉施設の現状と課題」に始まり、その後、5つの分科会に分か

れて活発な討議がなされました。

2日目には「子どもの権利擁護と養育のいとなみ」をテーマにシンポジウムを開催。栃木県にある養徳園園長補佐の加藤準一さん、県央里親会の大貫明子さん、(N)子どもセンターでんぼ副理事長で弁護士の小坪淳子さん、県立総合療育相談センター精神科医の清家洋二さんが登壇し、旭児童ホーム施設長の伊達直利さんのコーディネートのもとで進められました。

シンポジウムの発表を踏まえて、権利擁護は単に権利を侵害しないという意味ではないこと。養育という観点から、子どもの最善の利益という目標に向けて、さまざまな関係機関が横の連携を、時間軸によって関わる支援者同士が縦の連携を広げることでつくるネットワークによって保障され得るものであることが確認され、幕を閉じました。

(社会福祉施設・団体担当)



開会宣言をする田崎実行委員長